

### 共通テーマ「北京オリンピック雑感」：北京オリンピックを振り返って：フェンシングの成功から選手強化を考える

IZUMI, Shigeki / 泉, 重樹

---

(出版者 / Publisher)

法政大学体育・スポーツ研究センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学体育・スポーツ研究センター紀要 / 法政大学体育・スポーツ研究センター紀要

(巻 / Volume)

27

(開始ページ / Start Page)

84

(終了ページ / End Page)

84

(発行年 / Year)

2009-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007506>

共通テーマ

「北京オリンピック雑感」

## 北京オリンピックを振り返って ―フェンシングの成功から選手強化を考える―

泉 重 樹 (現代福祉学部 専任講師)

北京オリンピックが終わり、結果的には金メダル獲得数がアメリカを上回る1位の結果で、中国の国威は大いに発揚されたものの、スポーツ以外の政治面、経済面でも大きな注目を集めるオリンピックとなった印象がある。日本のメダル獲得数は金9個で国別には8位だったが、総数では25個（アテネは37個）であり、国別では11位であった。私自身、スポーツ関係者としてオリンピックに出て、なおかつ勝つことの難しさを十分に承知しているものの、あえてメダル獲得数に焦点を当てて考えてみたい。文部科学省「スポーツ振興基本計画」では夏季、冬季あわせて3.5%のメダル獲得を政策目標に掲げている。今回はメダルの総数が961個だったので日本の25個は2.6%となり、もともと冬季五輪では夏季ほどのメダル獲得が見込まれないことから、この数字はアテネがよかっただけに、目標を大きく下回る結果となった。また金9個のうち、新しい顔ぶれは柔道の石井選手とソフトボールだけであり、次回のロンドン、さらにその次に見込まれる東京を見据えた強化策がどの競技団体でも必須である。

今後を見据えた強化という点から、浅見（参考文献1, 2）は2007年末に完成して稼働し始めたナショナルトレーニングセンター（NTC）に練習施設を持つ競技種目のうち、一部の種目以外はその活用が必ずしも十分ではないことから、施設の活用をどうすべきかを十分に考えて各競技団体には実行していただきたいとしている。国立スポーツ科学センター（JISS）を有効活用していた競技は競泳、シンクロ、カヌー、レスリング、フェンシング、体操などで、いずれもアテネからあるいは年月をかけての活用が実って北京で好成績を挙げた団体である。なかでもフェンシングは練習拠点のJISSで500日の長期合宿練習を行い、練習場が狭いことから最も有望なフルレだけに種目を絞って強化に当たっていたそうである。そんな中、フェンシングナショナルチームのオレグコーチがJISSに全面的な医・科学サポートを受けたいと相談に来たとのことで、その結果、様々なサポートが行われた。そのサポート内容として、選手はポイントを稼ぎにヨーロッパに出かけたり帰ったりをする必要があったが、時差調整や栄養管理などへのアドバイス、メンタルサポート、また相手の技術分析のための映像収集にはキューバの世界大会にも研究員を送った、などである。選手の努力はもちろんのこと、このようなサポートの甲斐あって太田選手の銀と女子の菅原選手も初の入賞（7位）という好成績が得られたと考えられる。

ボクシングが専門である私自身、同じ格闘技種目であるフェンシングの成功に大きな刺激を受けた。ボクシングも狭い練習場で競技が可能である点からもフェンシング同様の医・科学サポート体制をとることで現状を打開するきっかけが得

られることは十分に期待できる。

JISSは今年から文科省の委託事業として「チーム『ニッポン』マルチサポート事業」に取り組んでいる。その事業は「メダルを獲得するための統一的、包括的戦略に基づいて多方面からの高度な情報・医・科学支援を戦略的・包括的に実施するシステムを構築することを目的とし、その構築したシステムの中で高度な情報・医・科学支援を戦略的・包括的に実施し、2012年ロンドン・オリンピック競技においてメダルを獲得することを目標とする」とある。そしてそのために文科省、JOC、JISS、中央競技団体等の連携によるマルチサポート戦略本部を設置して企画立案等の中央機能を担当し、ここで選定したメダル獲得の有望な種目や競技者に対して、特別支援チームを編成してことに当たる、としている。いうまでもなく各競技団体がこの制度をうまく活用して強化していくことが望まれる。しかしながらサポートはコーチと競技者とサポートする側のよい人間関係、信頼関係の上に成り立つものである。なかでも選手を指導するコーチの占める役割は非常に大きいと考えられる。「長期的にみた競技力の向上」という視点を持ちながら「次の試合に勝つ」とことを考えることは大変難しいが、その中でJISSやNTCというサポート体制や施設をうまく各競技に利用できる「柔軟に考える姿勢」が現場を預かっているコーチや指導者には大切であると考ええる。

### 参考文献

1. 浅見俊雄（2008）北京オリンピックを振り返る。コーチングクリニック 2008年11月号 p80-81
2. 浅見俊雄（2008）ロンドンそして東京へ向けて。コーチングクリニック 2008年12月号 p80-81